様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２２９４

研究課題名（和文）琵琶師伝集『胡琴教録』の総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study of _Kokin kyōroku_, an early 13th-century manual on _biwa_ (lute) playing

研究代表者
Ｎｅｌｓｏｎ　Ｓｔｅｖｅｎ（NELSON, Steven G.）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：６０３２６１７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中原有安の言談などを弟子（おそらく養子の景安）が取りまとめた、鎌倉初期に成立した琵琶師伝集『胡琴教録』について、(1) 諸本研究、(2) 人物・史実、(3) 奏法・楽理の各分掌に分かれて調査研究を行った。定例研究会で本文の輪読作業を行い、2019年度末時点では『胡琴教録』上巻の校訂本文作成はほぼ完成した。中間報告を兼ねて、2019年12月、仏教文学会・説話文学会合同例会のシンポジウム「音楽と文学―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」にて研究成果を報告し、2021年度、学術雑誌『仏教文学』第46号及び『説話文学研究』第56号に公表した。論文集および注釈書の公刊が計画されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
将来的に注釈書を公刊することによって、この協働研究の成果を諸分野の研究者に『胡琴教録』の良質な本文資料を提供することになる。これに基づいて様々な研究へと派生し、発展していくことが期待される。また本研究は、一つの文献に関して多角的なアプローチをとる学際的研究のモデルケースともなり、雅楽、歌謡など、様々な研究に応用されうるものとなるであろう。

研究成果の概要（英文）：_Kokin kyooroku_ (Record for teaching the barbarian zither) is a two-volume instructor's manual for the four-stringed lute biwa, recording the teachings of Nakahara no Ariyasu. It was compiled in the early 13th century by one of his students, probably his adopted son Kageyasu. Our collaborative research project attempted a comprehensive study of the source, dealing with the text (rare manuscript copies of the second volume written mainly in kanji, and multiple manuscript copies of both volumes written mainly in kana), the people and events mentioned in it, and its instructions regarding biwa performance and related music theory. An annotated version of the first volume is planned. A symposium devoted to the source was given at the joint meeting of the Japanese societies for Buddhist literature and narrative tales in December 2019; the results were published in the 2021 issues of the journals of both societies. A volume of essays, with full versions of each paper, is in preparation.

研究分野：日本音楽学史学（古代・中世）、中国の隋・唐代を中心とした東洋音楽史。

キーワード：楽琵琶　独奏曲　古楽譜　唐楽　三秘曲　中原有安　三五要録　諸調子品撥合譜

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究開始当初まで研究代表者は、鎌倉時代以前の琵琶独奏曲の全貌を明らかにするべく、琵琶古楽譜の文献学的調査、楽譜本文の翻刻、五線譜化、復元試演などを行っていた。復元の際は、古楽譜だけではわからない、基本奏法に関する具体的な情報を補うべく、楽書類の説を援用した。その過程で、琵琶師伝集『胡琴教録』が、琵琶の具体的な奏法、音律や調絃、相承などに関して豊富な情報を有しており、琵琶のみならず当時の音楽伝承の実態を知る上で、極めて史料性の高い文献であることが確認された。よってこの『胡琴教録』の校訂本文を作成、公刊し、学界に提供することが急がれるが、その際、以下の三点について検討が求められた。すなわち、諸本研究、人物・史実関係の整理、および奏法・楽理に関する検討である。

(1) 諸本研究　『胡琴教録』(上下二巻) の伝本は、真名本系統と仮名交り本系統に分類される。諸本研究は山田（1942)、森下（1997)、神田（2006）らによって進められ、仮名交り本は真名本を仮名書きにしたものであるという説が有力視されている。但し、真名本は下巻のみ伝存が確認されている。仮名交り本系統については、群書類従本（『群書類従』管絃部［続群書類従完成会、1912］ほか）のほか、南北朝時代の古写本で、仮名交り本系統の祖本とされる伏見宮家旧蔵本が活字化されている（図書寮叢刊『伏見宮旧蔵楽書集成』二［明治書院、1995］)。しかし、両書とも翻刻、解題が示されるに留まり、読点の位置、人物の比定などに問題が見られる。また、より古態に近いとされる真名本系統（下巻のみ）については、神田（2006）が猪熊信男旧蔵本の翻刻と校異を示して以来、あまり活用されていない。未確認資料を含めた本文の調査と分析、および校訂本文の作成、公刊が急がれる。

(2) 人物・史実　『胡琴教録』の筆録者（作者)、その琵琶の師をはじめとする登場人物について明らかにする必要がある。山田、石田（1983)、森下（1993)、相馬（2001）らの考察によって、琵琶の師は平安院政期から鎌倉初期に活躍した楽人中原有安（生没年不詳）であり、筆録者については議論があるものの、有安の養子である景安とする説が有力視されている。景安は 1225 年に関東に下向し鎌倉一者となっており、関東での活躍も視野に入れ、執筆時期などを再考する必要がある。また、中原有安や筆録者の立場と、琵琶の二大流派である桂流、西流との関係、および二流の説を承けた藤原師長との関係についても、検討の余地が残されている。

(3) 奏法・楽理　琵琶の奏法、理論に関する研究は林（1969）を始めとする古楽譜等の分析によって行われてきた。しかし、拍子や旋律に関する情報を有する古楽譜には、基本奏法等の当時の常識的な部分についてはほとんど記されていない。一方『胡琴教録』には、琵琶の構え方や撥の扱い方、調絃時の配慮など、実践的、具体的な情報が多く記されている。近年これらの記述が注目され、研究代表者ネルソン（2013)、田鍬（2016）らの復元試演にも活用されるようになった。改めて、奏法や理論に関する記述の解読、古楽譜や楽書との照合、実演による検証が求められる。

２．研究の目的

当初は、以上の三点について、次の目的を掲げた。

(1) 諸本研究　先行研究の成果をふまえた結果、仮名交り本系統の祖本とされる伏見宮家旧蔵本（上巻)、真名本で最も古態を示す猪熊信男旧蔵本（下巻）を定本と定める。関係諸本の再調査を行うことによって、両本の古態性を確認するとともに、伝存が確認されていない真名本系統の上巻についても博捜する。また、以上の調査をふまえて対校本を選び、定本と校合して校訂本文を作成する。

(2) 人物・史実　筆録者、琵琶の師、その他登場人物らについて検討し、琵琶の伝承における『胡琴教録』の位置、特に桂流、西流との関係について明らかにする。また、記事と史実との照合を行い、年表、人物略伝などの作成を行う。

(3) 奏法・楽理　琵琶の基本奏法、および楽理に関する記事を精読し、古楽譜、楽書との照合や実演による検証を行い、鎌倉時代初期の琵琶の基本奏法、および楽理を解明する。また、得られた成果に基づいて、琵琶独奏曲や唐楽曲などの復元試演を行う。

本研究の特色は、文学、史学、音楽学の研究成果を結集することによって、『胡琴教録』を多角的な視点から読み解く点にある。同趣の取り組みとして、岩佐美代子による『文机談』（琵琶道に関する歴史物語）に関する研究が先駆となり、画期的な成果（岩佐 1989、2007）を上げているが、音楽史的観点からの検証は十分にされていない。本研究においては、研究代表者、分担者２名（磯水絵、櫻井利佳）ともに、これまで文学・史学・音楽学の垣根を越えてその成果を積み上げてきており、それぞれの専門性を発揮して協働することによって、各専門分野の見解に万全を期することができる。

３．研究の方法

『胡琴教録』について、伏見宮家旧蔵本（上巻）、および猪熊信男旧蔵本（下巻）を定本と定め、定例研究会で輪読を継続し、翻刻、校訂作業を進めた。これと並行して、諸本調査を行い、定本と諸本の関係を再確認した。輪読の過程で明らかになった問題を基に、古記録、楽書などにあたり、筆録者を始めとする人物関係の整理、および記事中の出来事と史実とを照合した。また、奏法・楽理に関する記述について、古楽譜・楽書による照合、および実演による検証を行った。

以上の成果を統合し、文学・史学・音楽学の各分野の研究者の利用に供するべく、解題、翻刻、注釈、現代語訳、年表、人物略伝、楽譜資料、解説などの執筆作業を進め、公刊に備えようとしたが、研究会での輪読が長らくできなくなってしまった時期が 2 つあった（研究代表者が怪我をし、2 度にわたる外科手術を受け［2017 年 3 月～2018 年 4 月］、COVID-19 禍発生以降、研究分担者の一人は退職後、重病で長期入院し学界を離れることとなり、また研究協力者の教育機関への就職等が決まり、メンバーが離散した［2020 年 3 月～］）。そのため、校訂本文作成の完成は上巻のみに留まった。なお、研究会の開催ができなかった時期でも、個人や少人数で行える調査研究を続けた。全期間を通して各分掌が行った主な調査研究は次の通り。

(1) 諸本研究

① 関西方面における未確認の『胡琴教録』伝本および関連書資料の調査を行った。神田（2006）にまとめたものを含めての再調査・確認が主となったが、2006 年調査時点での見落とし等、書誌情報に幾つかの訂正をすることができた。なお、京都大学の所蔵資料に関しては、さらなる調査の必要性が確認された。

② 真名本（下巻のみ）と仮名交り本（上下巻）の関係について、その緻密な比較に基づき、『胡琴教録』の原態は真名本であり、仮名交り本はそれを仮名書きに直そうとしたものであるとの結論に至り、神田が改めて定例研究会で報告した。

③ 2019 年 3 月、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授、武内恵美子氏の好意により、イギリスに渡っている以下の貴重な『胡琴教録』写本の写真を入手することができた。大英博物館蔵平松家旧蔵本（上下巻の仮名本［2-9/10］、同［2-17/18］、下巻の真名本［2-19］）、ケンブリッジ大学図書館蔵菊亭旧蔵本（上巻の仮名本［143］）。その一部を 2019 年度の定例研究輪読会における対校本に加えることとした。英語を母語とする研究代表者は渡航しての再調査を計画したが、諸般の事情で断念せざるを得なかった。

(2) 人物・史実

①『胡琴教録』に載る人物すべてについて、既存の調査結果（森下 1995）と照合しつつ訂正の必要の有無を確認した上で、各人物についての先行研究調査を行った。

② 諸楽書（『群書類従』・『続群書類従』両管絃部、図書寮叢刊『伏見宮旧蔵楽書類』一～三）の人物索引を作成した。

③『胡琴教録』本文中における主要な出来事について、史実に照らし合わせ、一覧できるように「『胡琴教録』編年年表」にまとめた。

(3) 奏法・楽理

① 研究代表者ネルソンの研究課題 26370112「琵琶古楽譜の独奏曲―失われた演奏伝承の「再生」に向けて」の延長が認められたため、『胡琴教録』とほぼ同時期に成立した琵琶譜『三五中録』の解読を中心として、琵琶独奏曲のリズム・テンポ・奏法の解明に関わる研究を続けた。楽琵琶奏者、中村かほる氏協力のもと、国際会議（上海音楽学院、2017 年 9 月）での報告・実演を行い、さらに琵琶独奏曲のスタジオ録音を行い、後の発信に備えた。詳細は当該研究課題の実績報告を参照されたい。

②『胡琴教録』本文の解釈に関わる『三五要録』等の琵琶譜を中心に、同時代の楽譜の翻刻、訳譜、および分析を行った。

③ 研究代表は楽琵琶奏者の中村かほる氏の協力のもと、琵琶秘曲《石上流泉》と箏秘曲《千金調子》について国内学会（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター主催、2019 年 3 月）で報告・実演を行った。

本研究の中間報告を兼ねて、2019 年度仏教文学会・説話文学会合同例会のシンポジウム「音楽と文学 ―『胡琴教録』の作者は鴨長明か」（12 月 7 日、於二松学舎大学）にて、各分掌の研究成果を、分掌の垣根をある程度取り払って、次の三部構成で報告した。

(1)《第一部》「楽書と文学 ―『胡琴教録』を中心に―」。内容：「『胡琴教録』の成立をめぐって」（二松学舎大学博士前期課程 落合愛菫）、「『胡琴教録』中の玄上について」（二松学舎大学博士後期課程 鈴木和大）、「『胡琴教録』の原態について」（二松学舎大学非常勤講師 神田邦彦）、「『胡琴教録』の作者は鴨長明か」（二松学舎大学教授 磯水絵）。楽書の研究を中心にしつつ、文学と芸能の関わり、『胡琴教録』の内容と、その作者について報告した。

(2)《第二部》「琵琶の流派とその説話 ―桂流と西流―」。内容：「西流の楽書と演奏家」（上野学園大学日本音楽史研究所講師 櫻井利佳）、「中原有安と桂流」（神田邦彦）。『胡琴教録』の成立し

た背景にある音楽史、特に琵琶伝承の二大流派について追究した。

(3)《第三部》「琵琶の音楽（調絃、曲種、奏法）―『源氏物語』宿木巻を起点に・付実演―」。内容：「琵琶の撥合（かきあわせ）から秘曲まで」（法政大学教授 スティーヴン・G・ネルソン）、「秘曲《啄木》の謎を解く」（招待講演、日本学術振興会特別研究員 早川太基）。実演：琵琶奏者中村かほる。『源氏物語』に描かれた音楽場面を端緒として、第一部で触れた『胡琴教録』中にみられる調絃法や秘曲、それにまつわる説話等について言及し、秘曲に関する新見解を提示する報告と、第二部に触れた流派による奏法の相違等を古楽譜に基づいて実演し、当時の琵琶音楽への理解の一助とした。

シンポジウムの内容は、下記の主な発表論文等の一覧の通り、仏教文学会・説話文学会の機関誌に掲載された。『仏教文学』第 46 号（2021 年 6 月）には、『胡琴教録』の成立（落合）、本文の原態（神田）や作者の問題（磯）に加えて、琵琶の名器 玄上（玄象とも）に関わる『胡琴教録』の言説（鈴木）に関する論考を載せた。一方、『説話文学研究』第 56 号（2021 年 9 月）には、琵琶の秘曲、いわゆる「三曲」の形成と音楽説話（櫻井）、中原有安と琵琶桂流（神田）、そして琵琶秘曲《上原石上流泉》に関わる説話の、『源氏物語』との関連性（ネルソン）に関する論考を載せた。

以上の学術雑誌刊行を受けて、『胡琴教録』に関する学術論文集（胡琴教録研究会編『中世の琵琶師伝集 ―『胡琴教録』の研究―』［仮題］）を計画し、2022 年度以内の刊行を目指したが、諸般の事情で編集作業が遅れており、繰り下げることになった。

４．研究成果

以上の研究発表、雑誌論文等の主たる研究成果をまとめ、列挙する。

(1) 成立過程　最も基礎的な問題は、伝本の表記法の違いにある。上記の通り、伝本は真名本系統（下巻のみの零本）と仮名交り本系統（上下巻とも）に分類される。先行研究や今回の神田の調査研究の結果（『仏教文学』46 の論考）からして、原態が真名本であったことはもはや論を俟たない。そこで、琵琶師匠の言談集（師伝集）としての性格を考慮すると、『胡琴教録』の成立過程には区別するべき、次の 4 段階があったと思われる。

① 記述の内容となる事件の年次　有安が作者に語った出来事の起こった時期（成立以前）。上限は 1150 年代半ば、下限は 1190 年代半ば、多くが二条天皇在位（1158-65）のものである。確実な事件年次は久寿元（1154）年 2 月 14 日～治承 2（1178）年 12 月 28 日の間。有安の記憶違いに起因するらしい矛盾もないわけではない。

② 談話・筆録の期間　有安が作者に①を語り、それを作者が書き留めた時期。短く見ても仁安元（1166）年から、有安の没年に近いと思われる建久 5（1194）年までの 28 年を含んでいる。

③ 真名本の執筆期間　作者が②で筆録したものを項目ごとに整理し、『胡琴教録』真名本を編集・執筆した時期。文体の特徴から、有安の言談を筆録したものに加えて、有安の日記のような漢文記録類を参照した可能性もある。とりあえず 1194 年以降ということになるが、裏書や追加記事もあって下限は確定しにくい。作者と目される有安の養子景安（景康）の関東下向（1225 年）に成立したという五味（2003）の推論を否定する材料はない。

④ 仮名交り本の執筆期間　仮名交り本の奥書によれば、作者とは別人の女性が③の真名本を仮名交り文に書き換えたと思われる時期。有安の孫光氏が子女のために仮名に直させた可能性も考えられるが、いずれにしても仮名交り最古写本（宮内庁書陵部伏見宮本、伏 1506）が書写される南北朝期までに作成された。真名本と仮名交り本が揃う下巻を比較検討すると、仮名交り本には真名本の訓読を誤ったと思しい箇所が散見するため、真名本を欠く上巻の仮名交り本にも相当量の誤りがあることが想定され、その校訂にはそれを前提とした想像力も必要といえる。

なお、作者が景安（かその兄弟）ではなく、鴨長明であるとの説もある（今村 2008）が、根拠となっている文体や用語の分析は仮名交り本を対象としており、前提が誤っているため、今回はその説は論破された（磯『仏教文学』46 の論考）。

(2)『胡琴教録』の構成　森下（1993）も指摘している通り、『胡琴教録』の構成はかなり整然としており、上巻は初心者に琵琶を教え始めるところから順序立てたものとなっている。次の通りである（①～⑮は本文冒頭の目次と本文中に見出しとして現れる標目）。

・弟子を取る師の心得（①「教学琵琶」：弟子の儲け方と教え方、楽譜の扱い方など）
・琵琶演奏に関わる事柄（②「琵琶体様」：演奏時の姿勢、③「調琵琶」：調絃、④「取撥」：撥の持ち方、⑤「差柱」：柱の押さえ方、⑥「撥音」：撥の使い方）
・楽理（音律）関係（⑦「諸調子品」：調絃および調子、⑧「十二律調」：十二律、⑨「呂律分別」：呂律の違い。⑧と⑨にかけて、十二律の全てが演奏可能な、呂律兼用の新調絃に言及）
・琵琶が演奏する曲種（⑩「楽曲」：唐楽の合奏曲を中心に記しているが、舞楽の伴奏にも高麗楽［「右楽」］にも言及、⑪「催馬楽」：琵琶を伴奏楽器に使用する宮廷歌謡、⑫「撥合」（「かきあわせ」）：調絃を確かめるための短い独奏前奏曲、⑬「手」：秘曲を含めてその他の独奏曲。⑩～⑬は琵琶の曲種を一般的な合奏曲から段階的に重要な曲種へと並べる）

・楽譜の読み方（⑭「案譜法」：楽譜の読み方を記したものだが、筆録者にも理解できなかった古譜のものらしく、末尾か裏書からの混入かとも思われる）
・師 中原有安の楽統（⑮「師伝相承」：有安が桂流の正統な説の継承者であることなど）
一方、下巻については研究会において詳細な検討は行っていないが、内容は貴顕の前で演奏する時の用意、貴顕が名器「玄上」を弾く時にお手伝い役として用意すべきことなど、琵琶に関わる様々な故実・口伝を、地下（じげ）楽人の視点からまとめた実用的な話題が中心となっている。

(3) 琵琶伝承の流派　上巻末尾の「師伝相承」で桂流の正統な継承者としての有安の立場を明らかにしながら、『胡琴教録』は桂・西の二流のいずれに与するのではなく、当時の琵琶伝承を二流とは異なる視点から捉えるものとなっている。有安は両流の間にあって、両者を比較しながら、時には批判し、時には自説を展開する。貴顕の師範として両流に通じていなければならなかった。

(4) 秘曲と秘曲伝授　中世の説話文学などでは遥かに古い由来譚が語られるが、琵琶の三曲（三秘曲）、すなわち《流泉》《啄木》《楊真操》の初出は、《上原石上流泉》が源経信（1016-97）の自筆琵琶譜、その他が大江匡房（1041-1111）の「琵琶銘并序」や『江談抄』であり、史料上では院政期を遡らない。それぞれの成立について、研究会メンバーの現在の理解は概ね次の通り。
①《石上流泉》は唐伝来の琴曲を琵琶に移したもので、《上原石上流泉》はそれを編曲したもの（ネルソン『説話文学研究』56 の論考）。
②《啄木》は宋代流行の琵琶独奏曲で、日本への渡来は院政期であろう（早川 2018；2019 年 12 月シンポジウム講演）。
③《楊真操》は院政期の日本における作曲か（小林 2014）。
こうなると、秘曲の登場は桂流と西流という琵琶師範家の登場時期とも重なってくる。また、『胡琴教録』上巻「師伝相承」にみられる、経信の子息基綱から外孫の娘大原尾張殿への秘曲伝授の話が事実であれば、これは基綱の大宰帥赴任（永久 4［1116］年）以前のこととなり、また時期的に重なってくる。琵琶秘曲の出現、琵琶師範家の形成、そしてそれを支える琵琶秘曲伝授という装置の誕生には、共に大宰府に下向した源経信・基綱父子が関係している。

(5) その他　『源氏物語』注釈の誤りや、琵琶調絃名と雅楽調子名の混同から生じる誤解について、研究代表者の論考を参照されたい（『説話文学研究』56）。

なお、2020 年度以降、本研究の定期研究輪読会の開催ができず、研究会としての活動が停滞している間、研究協力者の神田邦彦（現 花園大学専任講師）は精力的に発表を続けてきた。また、同人は研究活動スタート支援 20K22000「琵琶桂流の歴史的研究」において、定例研究輪読会の中で得た着想などを基に、研究内容を飛躍的に進展させている。研究代表者として心から感謝すると共に、益々の発展を期待したい。

〈引用文献〉
石田百合子（1983）「胡琴教録の舞台と人物」（『上智大学国文学論集』16:59-85）
今村みゑ子（2008）「第二章 『胡琴教録』作者考―長明作者の可能性」（『鴨長明とその周辺』、和泉書院）
岩佐美代子（1989）『校注文机談』（笠間書店）
（2007）『文机談全注釈』（笠間書店）
神田邦彦（2006）「『胡琴教録』真名本について」［附載「『胡琴教録』真名本　翻刻・校異」、「『胡琴教録』諸本解題目録稿」、「『胡琴教録』研究文献目録」］（『日本漢文資料 楽書篇　雅楽資料集《論考篇》』、二松学舎大学 21 世紀 COE プログラム、220-310）
小林加代子（2014）「楊貴妃と琵琶―楽琵琶の三曲の一つ「楊真操」と院政期の漢籍受容」（アジア遊学 174、大橋直義・藤巻和宏・高橋悠介編『中世社寺の空間・テクスト・技芸 ―「寺社圏」のパースペクティヴ』、勉誠社）
五味文彦（2003）「芸の伝承と家　楽書の展開　三『胡琴教録』と琵琶の家」（『書物の中世史』、みすず書房）
相馬万里子（2001）（楽人誌）「中原有安―九条兼実、鴨長明の琵琶の師」『日本音楽史研究』3:146-47）
田鍬智志（2016）（講演）「平安末期の雅楽―藤原師長の琵琶譜『三五要録』と箏譜『仁智要録』を弾く」（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター平成 27 年度後期「でんおん連続講座 F」、於京都市立芸術大学）
スティーヴン・G・ネルソン（2013）「「秘曲尽くし」再現―『文机談』に見える秘曲を聴く」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』、新典社）
早川太基（2018）「琵琶曲「啄木」攷―宋代文人の聴いた音楽」（『東方学』136:22-39）
林謙三（1969）『雅楽―古楽譜の研究』（音楽之友社）
森下要治（1993）「胡琴教録の基礎的問題―成立時期・編者・編纂態度」（『国文学攷』140:1-13）
（1995）「胡琴教録人物覚書」（『広島大学文学部紀要』55:119-37）
（1997）「『胡琴教録』真名本の伝来―岩瀬文庫蔵本をめぐって」（『古代中世国文学』9:1-8）
山田孝雄解説（1942）『胡琴教録 下』（稀書複製叢書 57、古典保存会）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 磯水絵	４．巻 46
２．論文標題 前言（二〇一九年度十二月例会シンポジウム「音楽と文学―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 仏教文学	６．最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 落合愛菫	４．巻 46
２．論文標題 『胡琴教録』の成立をめぐって（二〇一九年度十二月例会シンポジウム「音楽と文学―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 仏教文学	６．最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木和大	４．巻 46
２．論文標題 『胡琴教録』中の玄上について（二〇一九年度十二月例会シンポジウム「音楽と文学―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 仏教文学	６．最初と最後の頁 17-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 神田邦彦	４．巻 46
２．論文標題 『胡琴教録』の原態（二〇一九年度十二月例会シンポジウム「音楽と文学―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 仏教文学	６．最初と最後の頁 28-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 磯水絵	4．巻 46
2．論文標題 『胡琴教録』の作者は鴨長明か（二〇一九年度十二月例会シンポジウム「音楽と文学―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 仏教文学	6．最初と最後の頁 40-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 磯水絵	4．巻 56
2．論文標題 「音楽と文学―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」について〔前言〕	5．発行年 2021年
3．雑誌名 説話文学研究	6．最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 櫻井利佳	4．巻 56
2．論文標題 琵琶秘曲「三曲」の形成と音楽説話（〔シンポジウム〕音楽と文学―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―　二〇一九年十二月例会）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 説話文学研究	6．最初と最後の頁 3-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 神田邦彦	4．巻 56
2．論文標題 中原有安と桂流（〔シンポジウム〕音楽と文学―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―　二〇一九年十二月例会）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 説話文学研究	6．最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 スティーヴン・G・ネルソン	4．巻 56
2．論文標題 二つの《流泉》、《石上流泉》と《上原石上流泉》 ―『源氏物語』の一場面が《上原石上流泉》を権威付ける説話の生成に活かされたか―（〔シンポジウム〕音楽と文学―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―　二〇一九年十二月例会）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 説話文学研究	6．最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 神田邦彦	4．巻 13
2．論文標題 西園寺実兼編『啄木調』考　―秘曲「啄木」の口伝書　付翻刻―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 花園大学日本文学論究	6．最初と最後の頁 21-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 根本千聡	4．巻 84
2．論文標題 藤原孝道楽書にあらわれる大神基政女夕霧流の演奏法	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東洋音楽研究	6．最初と最後の頁 45-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 神田邦彦	4．巻 14
2．論文標題 藤原貞敏による琵琶伝習の実態　付、『琵琶諸調子品』について	5．発行年 2021年
3．雑誌名 花園大学日本文学論究	6．最初と最後の頁 53-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 神田邦彦	4．巻 57
2．論文標題 中世日本の琵琶史観に関する試論	5．発行年 2022年
3．雑誌名 説話文学研究	6．最初と最後の頁 210-220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 神田邦彦
2．発表標題 中世日本の琵琶史観について
3．学会等名 説話文学会2021年度大会（オンライン開催）
4．発表年 2021年

1．発表者名 落合愛菫
2．発表標題 『胡琴教録』の成立をめぐって
3．学会等名 仏教文学会・説話文学会合同例会　シンポジウム「音楽と文学　―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」
4．発表年 2019年

1．発表者名 鈴木和大
2．発表標題 『胡琴教録』中の玄上について
3．学会等名 仏教文学会・説話文学会合同例会　シンポジウム「音楽と文学　―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」
4．発表年 2019年

１．発表者名 神田邦彦
２．発表標題 『胡琴教録』の原態について
３．学会等名 仏教文学会・説話文学会合同例会　シンポジウム「音楽と文学　―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」
４．発表年 2019年

１．発表者名 磯水絵
２．発表標題 『胡琴教録』の作者は鴨長明か
３．学会等名 仏教文学会・説話文学会合同例会　シンポジウム「音楽と文学　―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」
４．発表年 2019年

１．発表者名 櫻井利佳
２．発表標題 西流の楽書と演奏家
３．学会等名 仏教文学会・説話文学会合同例会　シンポジウム「音楽と文学　―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」
４．発表年 2019年

１．発表者名 神田邦彦
２．発表標題 中原有安と桂流
３．学会等名 仏教文学会・説話文学会合同例会　シンポジウム「音楽と文学　―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」
４．発表年 2019年

１．発表者名 スティーヴン・Ｇ・ネルソン（発表者）、中村かほる（琵琶演奏）
２．発表標題 琵琶の撥合から秘曲まで
３．学会等名 仏教文学会・説話文学会合同例会　シンポジウム「音楽と文学　―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」
４．発表年 2019年

１．発表者名 早川太基（発表者）、中村かほる（琵琶演奏）
２．発表標題 秘曲《啄木》の謎を解く
３．学会等名 仏教文学会・説話文学会合同例会　シンポジウム「音楽と文学　―『胡琴教録』の作者は鴨長明か―」
４．発表年 2019年

１．発表者名 ネルソン、スティーヴン（講演・箏演奏）・中村かほる（琵琶演奏）
２．発表標題 日本の雅楽の古譜を用いた琵琶曲・箏曲の復元
３．学会等名 公開講座「平安から唐へ 絲でたどるいにしへの韻　～琵琶・箏の古譜による琴曲の再現～」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 根本千聡
２．発表標題 『平家物語』白拍子起源譚と藤原宗輔女若午前の関係について
３．学会等名 説話文学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 スティーヴン・G・ネルソン（発表者）、中村 かほる（琵琶演奏）
２．発表標題 8~13世紀の日本における琵琶独奏曲について
３．学会等名 第12回日中音楽比較シンポジウム（上海音楽学院）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 根本千聡
２．発表標題 平安時代日本の唐楽における琵琶調絃の変化について
３．学会等名 第13回日中音楽比較シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 神田邦彦
２．発表標題 玄象と中世日本の琵琶史観
３．学会等名 中世文学会2022年度春季大会（オンライン開催）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	磯　水絵 (ISO Mizue) (60130407)	二松學舍大學・文学部・教授 (32664)	削除：2021年6月28日

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	櫻井　利佳 (SAKURAI Rika) (80622571)	上野学園大学・日本音楽史研究所・研究員 (32603)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	神田　邦彦 (KANDA Kunihiko)		
研究協力者	本塚　亘 (MOTOZUKA Wataru)		
研究協力者	根本　千聡 (NEMOTO Chisato)		
研究協力者	鈴木　和大 (SUZUKI Kazuhiro)		
研究協力者	落合　愛菫 (OCHIAI Masumi)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関